

平成20年度第2回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2009年1月～6月)のポイント

海況

潮岬以東の黒潮は、期間を通して規模の大きなC型流路で推移し、4～5月に一時的にB型流路となる。沿岸水温は、室戸岬以西が「平年並み」～「高め」、室戸岬～犬吠埼が「平年並み」～「やや低め」で暖水波及時に「高め」、伊豆諸島南部海域が「低め」でB型時に「高め」、犬吠埼以北が「低め」で暖水波及時に「高め」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、
やや低め＝平年値-1.0℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

2歳魚は前年を上回る。

全体としては前年並み～上回る。

マアジ太平洋系群

北薩～薩南、熊野灘、相模湾では前年を上回る。

日向灘～紀伊水道外域は概ね前年並み、
または前年を下回る。

マイワシ太平洋系群

低水準であり、前年並みか下回る。

カタクチイワシ太平洋系群

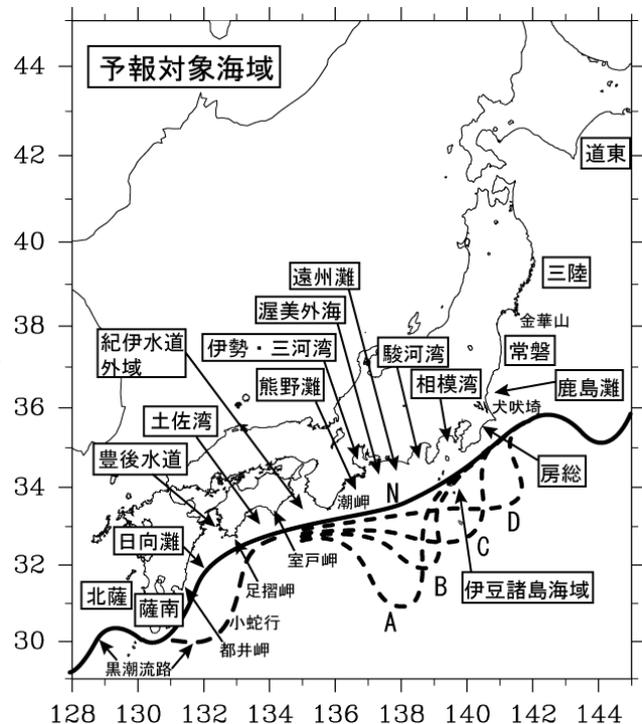
西日本は不漁であるが、

東日本は1歳魚主体に前年を上回る。

ウルメイワシ太平洋系群

北薩～薩南は前年を上回る。

他の海域は前年並みか前年を下回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2009年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・ 薩南海域の黒潮北縁は、屋久島南付近の平均的な位置で推移し、6月に離岸傾向となる。
- ・ 黒潮は、都井岬沖～足摺岬沖では2～3月と6月に一時的に離岸傾向となるほかは接岸傾向で推移する。室戸岬沖～潮岬沖では期間を通して離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は、期間を通して規模の大きなC型流路で推移し、4～5月に一時的にB型流路となる。
- ・ 野島埼沖の黒潮は、期間を通して接岸傾向で推移する。ただし、黒潮流路の変動に伴い一時的に離岸する。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・ 潮岬以西では、黒潮の離接岸に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。
- ・ 潮岬以東では、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島海域は概ね冷水域に入るが、黒潮流路の変動に伴い内側域に暖水が流入しやすい。B型流路のとき、熊野灘～遠州灘は内側反流による暖水の影響を受ける。伊豆諸島南部海域は蛇行北上部の変動に伴って昇温と降温を繰り返す。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 親潮由来の冷水の波及が継続する。
- ・ 房総沖の黒潮の離接岸や、暖水舌の形成によって、暖水が沿岸域へ波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・ 室戸岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・ 室戸岬～犬吠埼は「平年並み」～「やや低め」で、暖水波及時に「高め」で推移する。
- ・ 伊豆諸島南部海域は「低め」で推移し、B型流路のときに「高め」となる。
- ・ 犬吠埼以北は「低め」で推移する。ただし、暖水波及時に「高め」となる。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、

（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2008年8月～12月）（注：経過は図2を参照のこと。）

(1) 黒潮

- ・5月下旬以降、C型流路で推移した。
- ・9～10月、伊豆諸島南部海域の冷水域が東へと移動し、伊豆諸島の東で急に蛇行する流路となった。
- ・11月、C型流路の蛇行規模が拡大した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・7月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・8月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。
- ・9月、黒潮北縁は離岸傾向で推移した。
- ・10月以降、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。

◎潮岬以西

- ・8月、九州南東沖で6月に形成された小蛇行の一部が四国沖を東進した。
- ・9～10月、九州南東沖に残っていた小蛇行が小冷水渦として次々と四国沖を東進し、10月下旬には都井岬～潮岬沖で接岸傾向となった。
- ・11月、C型流路の規模の拡大に伴い、室戸岬～潮岬沖で離岸傾向となった。

◎潮岬以東

- ・9～10月、熊野灘～伊豆諸島域で黒潮内側反流が断続的に形成された。
- ・11月、黒潮内側反流から切離した小暖水渦が御前崎沖を西進し、遠州灘沖に停滞した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・8～9月、表層の昇温により、冷水の影響の残る下層との間に著しい水温躍層が形成された。
- ・10月、沖合の暖水塊から暖水が波及した。
- ・11月、下旬にかけて暖水波及の影響が徐々に弱くなった。
- ・12月上旬、親潮由来の冷水が南下した。

現況（2008年12月12日現在）

(1) 黒潮

- ・11月頃から規模の大きなC型流路で推移している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は屋久島の北に位置している。

◎潮岬以西

- ・黒潮は都井岬沖～足摺岬沖で「接岸」、室戸岬沖～潮岬沖で「やや離岸」している。

◎潮岬以東

- ・熊野灘沿岸を小暖水渦が規模を縮小させながら南下している。

- ・黒潮は房総半島に接近している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・親潮由来の冷水が波及している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

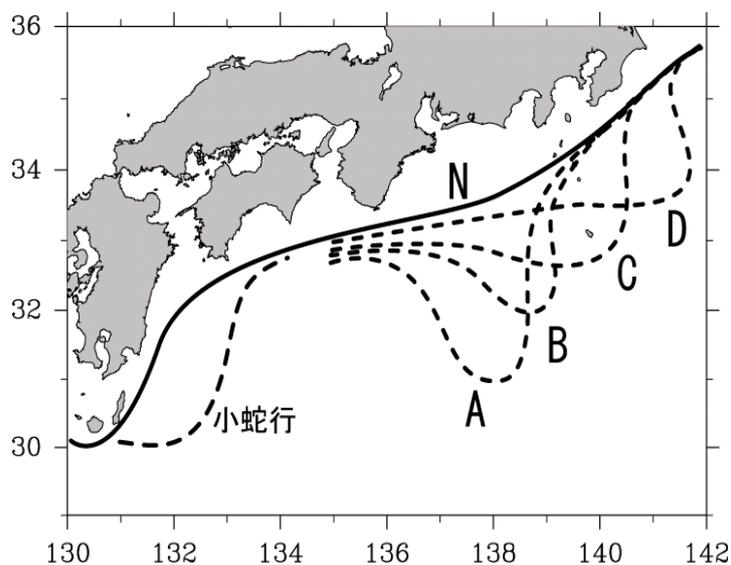


図1 黒潮流型の分類

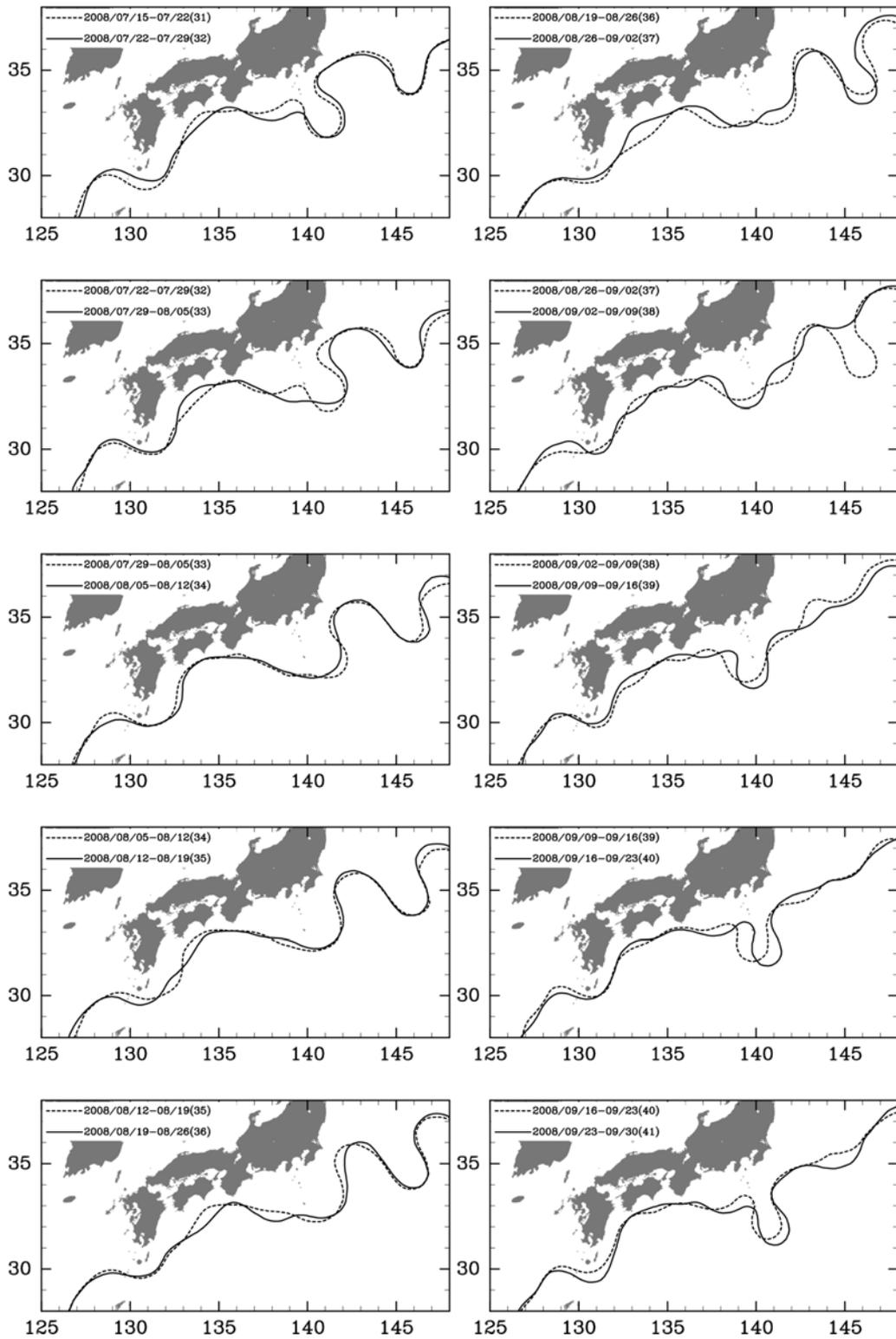


図 2a 黒潮流軸のパターン

(2008年7月～12月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

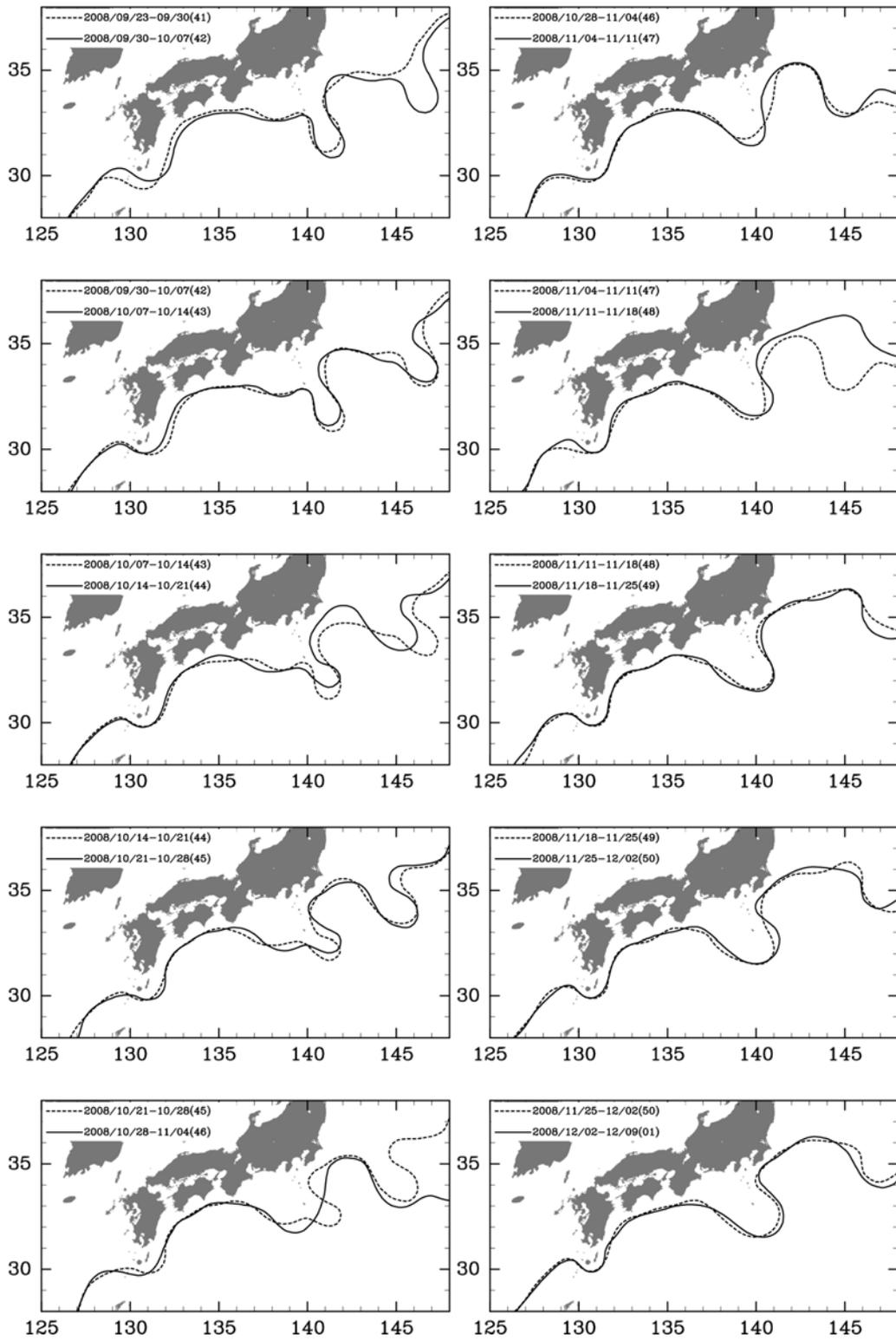


図 2b 黒潮流軸のパターン

(2008年7月~12月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成21)年1月～6月)

対象海域: 薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域

対象漁業: まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群: 1歳魚(2008(平成20)年級群)、2歳魚(2007(平成19)年級群)、3歳魚(2006(平成18)年級群)、4歳魚(2005(平成17)年級群)以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道(まき網、定置網)

(1) 来遊量: マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は、薩南では前年並み、日向灘～豊後水道では前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3、4歳魚は低い水準。サバ類全体としては、薩南では前年並み、日向灘～豊後水道では前年を上回る。

(2) 漁期: 期を通じて漁獲される。

(3) 魚体: ゴマサバが主な漁獲対象となる。29～33cm(2歳魚)主体に、薩南海域では25～31cm(1歳魚)が、豊後水道では期前半は35cm以上(3歳以上)、期後半は30cm以下(0、1歳魚)がそれぞれ混じる。

2. 紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量: マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期: 期を通じて漁獲される。

(3) 魚体: ゴマサバが主な漁獲対象となり、30cm前後(2歳魚)が主体。

3. 熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量: マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は前年を下回る。サバ類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期: 期を通じて漁獲される。

(3) 魚体: ゴマサバが主な漁獲対象となり、30cm前後(2歳魚)が主体。マサバは混獲程度。

4. 伊豆諸島周辺海域(棒受網、たもすくい)

(1) 来遊量: マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。4歳以上は少ない。マサバとしては前年を下回る。ゴマサバ1歳魚は高水準であった前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。ゴマサバとしては高水準であった前年並み。サバ類全体としては前年並み。

(2) 漁期・漁場: マサバ主体の漁場が形成される場合は伊豆諸島北部海域となる。ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となる。

(3) 魚体: マサバは28～32cm(2歳魚)が主体。ゴマサバは29～34cm(2歳魚)が主体。

5. 犬吠～三陸海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量: マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚、4歳魚は前年を下回る。マサバとしては前年並み。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3、4歳魚は前年を下回る。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体としては前年並み。

(2) 漁期・漁場: まき網の漁場は、1～3月は犬吠埼沖周辺、4月以降は常磐南部にも形成される。

(3) 魚体: マサバは28～32cmの2歳魚が主体となる。33cm以上(3歳以上)が期後半に混じる。ゴマサバは30cm前後(2歳魚主体)がマサバに混じる程度。

漁況の経過(2008(平成20)年7月~12月)および見通しについての説明

1.資源状態:

1)マサバ

資源量は依然低い水準だが、加入水準の高い2004年級群、2007年級群の発生により増加傾向にある。

2004年級群(5歳魚)は推定加入尾数37億尾の卓越年級群と評価され、発生後一貫して漁獲の主体となったが、残存資源量は減少している。

2005年級群(4歳魚)の加入尾数は5億尾程度と、加入量水準の低い2001・2003年級群並みの水準と判断され、残存資源量は少ない。

2006年級群(3歳魚)の加入尾数は1.7億尾程度であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は最低水準と判断され、残存資源量は少ない。

2007年級群(2歳魚)は、本年7月時点では加入尾数24億尾(2004年級群の7割程度)と見積もった。発生から現在までの累積漁獲尾数は2004年級群の7割程度である。釧路水試による6~10月の三陸~道東海域の流し網調査では2004年級群をやや下回るもののみとまって漁獲され、中央水研による北西太平洋浮魚資源調査でも2004年級群と同等に漁獲された。サンマ棒受網でも混獲がみられるなど、夏~秋季の太平洋北部での分布量は2004年級群に準ずる水準にあったと考えられることから、残存資源量は高い水準にあると考えられる。

2008年級群(1歳魚)は、本年7月~12月初めまでの各地漁業での漁獲は少ない。5月の移行域幼稚魚調査(中央水研、北水研)および6~7月の西部北太平洋サンマ資源調査(東北水研)によれば、最低ではないものの低い加入量水準であると考えられ、三陸~道東海域の流し網調査(釧路水試)では、過去同調査での最低水準の平均CPUE(0.2尾/回)であった。9~10月の三陸~道東~千島沖合海域の秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)では、出現率・平均CPUEが22.0%・22.2尾/網で、加入水準を反映していると考えられる出現率でみると2005年級群並みであった。サンマ棒受網への混獲は2007年級群より少なかった。以上の情報から、2008年級群の加入豊度は最低ではないものの低い水準と考えられる。

親魚量は2004年級群の高い加入により増加したが、続く2005、2006年級群の加入量水準は低く、2004年級群の残存資源尾数も減少している。2007年級群は2004年級群に準ずる加入水準の高い年級であると考えられる。今期は2歳魚であり、産卵への寄与はまだ低いが、今後のマサバ親魚資源の主体となる重要な年級群である。親魚量の減少を一時的なものにとどめ、マサバ資源の回復を図るためには、2007年級群の保護が必要である。マサバ太平洋系群の親魚量の回復を目指した資源回復計画は20年度以降も継続されることから、マサバ資源の回復のため2007年級群保護の努力に期待したい。

2)ゴマサバ

資源量は1996、2004年級群の高い加入量水準によって増加し、2005年にピークに達した後、2005、2006年級群の加入量水準が低いために減少してきているが依然高い水準にある。

2004年級群(5歳魚)は、推定加入尾数30億尾の卓越年級群であり、昨年秋まで各地漁業で漁獲されていたが、残存資源量は減少している。

2005年級群(4歳魚)は、推定加入尾数が4億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断され、資源量は少ない。

2006年級群(3歳魚)は、推定加入尾数が2億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は過去最低水準であると判断され、資源量は少ない。

2007年級群(2歳魚)は、11月までの各地漁業の漁獲状況では、2005、2006年級群の同期を上回って漁獲され、漁獲物の主体となった。1歳魚として道東~三陸海域のサンマ棒受網への混獲も多くみられた。調査船調査では、6~10月の三陸~道東海域の流し網調査(釧路水試)で2005年調査時の2004年級群に次ぐ出現状況であった。加入尾数は、7月時点では近年の平均的な水準の7億尾と推定されていたが、その後の漁況経過や出

現状を勘案すると近年の平均を上回る加入豊度であると判断される。

2008 年級群(1 歳魚)は、7 月から 12 月初めまでの各地漁業では、2007 年級群の同期を下回る漁獲状況であった。道東～三陸海域のサンマ棒受網への混獲割合(混獲のあったサンマ漁獲地点の割合)も前年を下回った。調査船調査では、5 月の移行域幼稚魚調査(中央水研・北水研)および 6～7 月の西部北太平洋サンマ資源調査(東北水研)からは 2006 年級群並みの低い加入豊度と判断された。三陸～道東海域の流し網調査(釧路水試)では、過去同調査での最低水準の平均 CPUE(0.2 尾/回)であった。9～10 月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(中央水研)では、出現率・平均 CPUE が 24.4%・2.5 尾/網で過去の同調査での中位程度の出現率と最低水準の CPUE であった。以上の情報から、2008 年級群の加入豊度は近年の平均を下回る低い水準であると判断される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、1 歳魚(2008 年級群)の加入量水準は低く、来遊量は多かった前年を大きく下回ると考えられる。2 歳魚(2007 年級群)の加入量水準は卓越年級群である 2004 年級群に準ずる高い水準と考えられ、来遊量は少なかった前年を大きく上回る。3 歳魚(2006 年級群)および 4 歳魚(2005 年級群)は資源量が少なく、来遊量は前年を大きく下回る。5 歳魚(2004 年級群)は卓越年級群であったが、残存資源量は少ないと考えられる。

なお 2 歳魚の一部と 3 歳以上は、本予報期間中は産卵のため房総海域以南へ南下し、たもすくい漁業の対象となる。しかし、黒潮流路がマサバの南下回遊に不利な C 型で経過すると予測されていることから、多くは期待できない。まき網漁場で漁獲対象となるのは本予報期間の後半(産卵後の北上期)と考えられる。

(2) 漁期・漁場

三陸海域から犬吠周辺におけるまき網によるサバ類の 7～11 月の漁獲は、13 万トン(暫定、うちマサバ 9.9 万トン)と、前年同期(10 万トン、うちマサバ 6.7 万トン)を上回った。千葉県以北沿岸の定置網による 7～11 月のサバ類の水揚量は 3.1 万トン(暫定、うちマサバ 1.8 万トン)と、前年同期(3.3 万トン、うちマサバ 2.5 万トン)を下回ったものの、近年の高い水準を維持した。

まき網漁場は、7 月は犬吠～常磐海域、8～9 月は三陸北部および三陸南部海域が中心であった。10～11 月は三陸北部海域および三陸南部海域～常磐北部、12 月は常磐北部～常磐南部海域で漁場が形成されている。本予報期間は、例年の傾向からまき網では犬吠～常磐海域が主漁場となる。たもすくいでマサバ主体の漁場が形成される場合は伊豆諸島北部海域となる。伊豆諸島より西の海域ではマサバの漁場形成はほとんど期待できない。

(3) 魚体

7～11 月のまき網漁獲物の主体をなした 2007 年級群の尾叉長は 28～32cm であった。本予報期間も引き続き当年級群がまき網の主体となる。一部は産卵のため南下し、たもすくいの対象となる。33cm 以上の 3 歳以上(2006、2005、2004 年級群)は来遊量水準が低く主体とはならない。2008 年級群の尾叉長は現在 25cm 以下であり、犬吠～常磐海域のまき網で漁獲されるが主体とはならない。なお各年級群の体長幅は広く重なり合っており、厳密な体長区分は困難である。

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、1 歳魚(2008 年級群)はこれまで得られている情報から近年の平均を下回る加入量水準とみられ、来遊量は多くの海域で前年を下回る。2 歳魚(2007 年級群)はこれまで得られている情報から 2004 年級群に及ばないが 2005、2006 年級群を上回る加入量水準と推定され、来遊量は低水準であった前年

を上回る。3歳(2006年級群)以上は、資源量が少なく、来遊量は前年を下回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

7～11月のゴマサバ漁況は、熊野灘以西の各海域では主に1歳魚(2007年級群)を対象に、紀伊水道では前年並み、それ以外では前年および平年を上回った。伊豆諸島周辺海域では、1歳魚主体に2、3歳魚(2006、2005年級群)混じりで前年を上回った。犬吠以北海域のまき網では、主に1歳魚と4歳魚がマサバに混獲され、漁獲量は前年を上回った。薩南海域を除き、いずれの海域でも0歳魚(2008年級群)は少なかった。7～11月の漁獲量は、薩南海域～紀伊水道外域は2.6万トン(前年同期実績0.9万トン)、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は4.1万トン(同2.3万トン)、犬吠以北海域はまき網が4.0万トン(同3.5万トン)、定置網などが1.3万トン(同0.7万トン)であった(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)。

各地の漁期・漁場は、薩南～熊野灘では2歳魚(2007年級群)が主体となって期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、2歳魚主体で期を通じて近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に漁場が形成される。犬吠以北海域では、2歳魚主体に犬吠埼周辺～常磐南部海域でマサバに混獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。1歳魚(2008年級群):30cm以下、2歳魚(2007年級群):29～34cm、3歳(2006年級群)以上:35cm以上。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成21)年1月～6月)

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚(2009(平成21)年級群)、1歳魚(2008(平成20)年級群)、2歳(2007(平成19)年級群)以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～薩南では主体の1歳魚は前年を上回り、2歳以上は前年並み。全体として前年を上回る。日向灘～豊後水道西部では前年並みか前年を下回る。豊後水道東部では前年を下回る。宿毛湾では前年並み。土佐湾では前年を下回る。

(2) 魚体：15～22cm(1歳魚)が主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

2. 紀伊水道外域～熊野灘南部(まき網、定置網)

(1) 来遊量：紀伊水道外域では前年を下回る。熊野灘南部では前年を上回る。

(2) 魚体：20～30cm(2、3歳魚)主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

3. 熊野灘中北部(まき網)

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 魚体：17～28cm(1、2歳魚)主体。期後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

4. 相模湾(定置網)

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 魚体：15～22cm(1歳魚)主体。期を通じて22～26cm(2歳魚)が、後半には4～12cm(0歳魚)が来遊する。

漁況の経過(2008(平成20)年8月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態：

資源量は1986(昭和61)年以降顕著に増大し、1990年代半ばは15万トンから16万トンと高位水準であったが1997(平成9)年からは減少に転じ、2001(平成13)年に増加したものの2005(平成17)年以降は減少が続いている。2007(平成19)年の資源量は約8万5千トンと中位水準であり、近年の資源動向は減少傾向である。

2006(平成18)年級群(3歳魚)は例年の経過から紀伊水道外域東部に来遊が予測される。この海域においては、今年7月以降の漁獲尾数が前年の同齡魚を下回ったので、資源量は前年の同齡魚より少ないと考えられる。

2007(平成19)年級群(2歳魚)は、例年の経過から、今漁期を通して紀伊水道外域東部で漁獲の主体となり、他の海域にも来遊が見られると考えられる。紀伊水道外域東部においては、今年7月以降の漁獲尾数が前年の同齡魚を下回ったので、資源

量は前年の同齡魚より少ないと考えられる。

2008(平成20)年級群(1歳魚)は、例年の経過から、北薩～紀伊水道外域西部、熊野灘、相模湾では今漁期を通して漁獲の主体となると考えられる。九州南東沖における表層網による稚魚の採集数と日向灘南部の大型定置網への入網は低水準の2005(平成17)年～前年を上回った。今年7月以降の漁獲尾数は前年の同齡魚と比較して、北薩～薩南、熊野灘と相模湾の定置網では多く、日向灘、紀伊水道外域西部では少なかったことから、前者の海域における資源量は前年を上回り、後者では下回ると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場：

(1)北薩～土佐湾 1歳魚(2008年級群)が来遊の主体となる。北薩～薩南では2008年級群の漁獲量が前年を上回ったので、来遊量は前年を上回ると予測した。日向灘では2008年級群の漁獲量が前年を下回ったので来遊量は前年並みか前年を下回ると予測した。豊後水道ではこれまでの2008年級群の漁獲量が低水準であることから、西部への来遊量は低水準の前年並みか前年を下回り、東部への来遊量は前年を下回ると予測した。宿毛湾では2008年級群の漁獲量が前年並みであったことから、来遊量は前年並みと予測した。土佐湾では2008年級群の来遊量が少なかったことから、来遊量は前年を下回ると予測した。

(2)紀伊水道外域～熊野灘南部 紀伊水道外域では来遊の主体となる2006及び2007年級群の資源量が少なく、2008年級群の漁獲量も前年を下回ったため、来遊量は前年を下回ると予測した。熊野灘南部では2008年級群の漁獲が高水準であることから、主体となる1歳魚の来遊量が前年を上回ると予測した。

(3)熊野灘中北部 2008年級群の漁獲が高水準であることから、主体となる1歳魚の来遊量が前年を上回ると予測した。2歳魚の来遊量の予測は困難であるが、全体の来遊量は前年を上回ると判断した。

(4)相模湾 主体となる1歳魚の来遊量と、前年の尾又長3～10cmの銘柄じんだの年間漁獲量とは正の相関が見られる。今年のじんだの漁獲量は極めて高水準で、7～11月の0歳魚の漁獲量も高水準であったことから、1歳魚の来遊量は高水準と予測した。2歳魚予測の知見は十分ではないが、近年は安定して来遊していることから、一定程度の来遊が期待できる。これらのことから来遊量全体は前年を上回ると予測した。

2009(平成21)年級群の来遊水準の予測は産卵期前のため現状では困難であるが、例年の傾向から予測期間後半に来遊すると考えられる。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成21)年1~6月)

対象海域：北薩～道東

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2009(平成21)年級群)、1歳魚(2008(平成20)年級群)、2歳魚(2007(平成19)年級群)、3歳魚(2006(平成18)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：1歳魚主体に前年並みか下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて散発的に推移する。

(3) 魚体：15～20cmの1歳魚主体。期の後半は13cm未満の0歳魚が主体になる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：1歳魚主体に、伊勢・三河湾では前年並み、駿河湾では前年を上回り、相模湾は少ない。

(2) 漁期・漁場：期を通じて散発的に推移する。

(3) 魚体：14～20cmの1歳魚主体。期の後半は11cm未満の0歳魚も出現する。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：漁獲の主体となる1歳魚は前年並みの低水準。2歳魚も低水準。3歳魚以上は少ない。全体として前年並みか下回る。

(2) 漁期・漁場：まき網漁場は犬吠埼周辺海域で、期の前半はカタクチイワシに混獲される程度であり、漁獲がまとまる可能性があるのは6月以降。三陸南部～仙台湾の定置網は5月から。三陸北部以北～道東海域ではまとまった漁場は形成されない。

(3) 魚体：1歳魚主体であり、1～3月は13～16cm、4～6月は14～18cm。2歳魚は20～21cm、3歳魚以上は21～22cmであるが少ない。

漁況の経過(2008(平成20)年8～11月)および見通し(2009(平成21)年1～6月)についての説明

1. 資源状態：

マイワシ太平洋系群の資源量は1994(平成6)年に100万トンを下回り、その後1999(平成11)年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2003(平成15)年は12万トン台まで減少したが、その後微増傾向にあり、2008(平成20)年当初としては約15万トンと推定された。

2006(平成18)年級群は、1歳魚として、2007(平成19)年2月の越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)での分布密度は前年を下回った。その後、6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)、6～9月に実施された表層流し網調査(釧路水試)並びに9～10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(東北水研)でも、沖合域における分布密度は低かった。さらに、前期(8～11月)の漁況経過も低調であったことから、今期の3歳魚としての資源量水準は前年を下回ると推定された。

2007(平成19)年級群は、2007(平成19)年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)、6～7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)で、2005(平成17)年級群と同程度の分布量が認められた。0歳魚としては、北薩～土佐湾海域においては前年を上回る好漁を示した海域が多かった。一方、紀伊水道外域以東の海域では低水準であった。2008(平成20)年2月の越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)では、CPUE(1時間曳網当たり採集重量)が0.30(kg/網)で、前年の0.12kg/網を上回るものの、水準は高くなかった。房総～常磐海域の未成魚越冬群指数(千葉水総研)は、0.61で2006(平成18)年級群の0.59と同程度であったが、2008(平成20)年の漁獲経過は低調であった。これらのことから、今期の2歳魚としての資源量水準は前年並みに低いと推定された。

2008(平成20)年級群は、2008(平成20)年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)に基づく加入量指数は

1. 9で前年の29.3を下回り、6～7月の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）でも前年を下回る分布状況であったことから、加入量水準は低いと推定された。また、6～9月に実施された表層流し網調査（釧路水試）では、0歳魚として前年を上回る採集尾数ではあったが、加入量水準は低いと推定された。さらに、9～10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研）での出現率も近年3年を下回った。前期における漁獲経過も低調であったことから、今期の1歳魚としての資源量水準は低いものと推察された。なお、伊勢・三河湾～相模湾では前年の0歳魚を上回る漁獲経過を示した。今後、未成魚越冬群指数（千葉水総研）並びに越冬期浮魚類現存量推定調査（中央水研）等の結果により年級豊度を判断していく。

2009（平成21）年級群は、今期後半において漁獲の主体となる可能性があるが、これを生み出す親魚となる年級群がいずれも低水準にあることから、現時点では、資源が大きく好転することを期待できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

(1) 北薩～熊野灘

来遊量：前期においては、北薩～紀伊水道外域のほぼ全域的に、0歳魚主体で前年を下回る漁獲であった。熊野灘の中型まき網では前年をわずかに上回ったが依然低水準であった。以上の漁獲経過から、今期の漁獲の主体となる1歳魚は前年を下回ると考えられる。

漁期・漁場：期を通じて漁獲されるが、来遊量は依然低水準であることから散発的と考えられる。

魚体：前期の漁獲の主体は17cm以下の0歳魚であった。期の前半もこれが引き続き1歳魚として主体となり、その体長は15～20cmと予測される。期の後半は、1歳魚以上の来遊量が少ない中で、13cm未満の0歳魚が主体になると考えられる。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾

来遊量：前期においては、駿河湾を除けば、伊勢・三河湾並びに相模湾で0歳魚主体での漁獲の回復傾向が見られた。これは、年前半のマシラス来遊量の回復からつながった傾向と考えられた。今期は、駿河湾では引き続き1歳魚として漁獲されると考えられる。しかしながら、伊勢・三河湾並びに相模湾では10月以降漁獲が減少しており、今期は前年並みか低調になると考えられる。

漁期・漁場：期を通じて漁獲されるが、来遊量は依然低水準であることから散発的と考えられる。

魚体：前期の漁獲の主体は17cm以下の0歳魚であった。期の前半もこれが引き続き1歳魚として主体となり、その体長は14～20cmと予測される。期の後半は、1歳魚以上の来遊量が少ない中で、11cm未満の0歳魚が主体になると考えられる。

(3) 房総～道東（まき網、定置網）

来遊量：今期の漁獲の主体となる1歳魚は、沖合域における調査船調査結果等から、加入量水準は高くないと推察される。今期の2歳魚の来遊量水準は、前期の1歳魚としての漁獲経過が低調であることから、前年並みの低水準と考えられる。今期の3歳魚以上の来遊量水準も、前期における散発的な漁獲状況と、残存資源量が少ないことから、前年を下回ると予測される。これらのことから、今期の来遊量は、全体として前年並みか下回ると考えられる。

漁期・漁場：まき網漁場は前年と同様、犬吠埼周辺海域と考えられる。来遊量が少ないことから、期の前半はカタクチイワシに混獲される程度であり、漁獲がまとまる可能性があるのは6月以降と考えられる。三陸南部～仙台湾の定置網の初漁期は5月からで、三陸北部以北～道東海域では今期にまとまった漁場は形成されないと考えられる。

魚体：前期の特に9月以降は0歳魚主体で16cm以下であり、17～20cmの1歳魚や、21cm以上の2歳魚以上は混じる程度であった。今期はこれに引き続き1歳魚が主体となり、1～3月は13～16cm、4～6月は14～18cmで推移すると予測される。2歳魚は20～21cm、3歳魚以上は21～22cmであるが少ないと考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2009（平成21）年1月～6月）

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0歳魚（2009（平成21）年級群）、1歳魚（2008（平成20）年級群）、および2歳魚（2007（平成19）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道では不漁で前年並みか前年を下回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10～12cmの1歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では不漁の前年並み。伊勢湾～相模湾では前年並み。

(2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海、相模湾では4月以降。熊野灘、駿河湾では全期間。

(3) 魚体：10～12cmの1歳魚主体。

3. 房総～道東（まき網、定置網）

(1) 来遊量：不漁の前年を上回る。道東の定置網は混獲程度。

(2) 漁期・漁場：1そうまきは1～4月で鹿島灘～外房沖、5～6月で常磐北部～外房沖。2そうまきは1～6月で犬吠埼～外房沖。三陸の定置網は1月までと4月以降。

(3) 魚体：10～12cmの1歳魚主体で、2歳魚は12～13cm以上。

漁況の経過（2008（平成20）年8月～12月）および見通しについての説明

1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998（平成10）年から2007（平成19）年まで80万～150万トンで推移している。水準は過去30年で高位、動向は5年間で減少傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2007（平成19）年級群は、2007年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）における10cm未満の未成魚の分布量や0歳魚としての道東への来遊水準から、0歳魚としては高水準であった。しかし、その後各地の漁獲には繋がらず、2008年1～6月における常磐・房総海域においては2007（平成19）年級群（1歳魚）が漁獲の主体となったものの、千葉県～福島県合計の漁獲量は7.3万トンで、1999年以降（21.4万～7.8万トン）で最低水準の2000年並みであった。この年級群は1歳魚の春季で体長12～13cm台に達しており、1歳魚としては大型で、成長が速く夏季の産卵後に死亡したと考えられ、1歳魚の夏秋季には道東へほとんど来遊しなかった。このため、現在では低水準となっており、今後の漁獲の主体とはならない。

2008（平成20）年級群は、2008年6～7月の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研）における10cm未満の未成魚の推定分布量が前年を大きく下回ったが、2008年9～10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研）では近年の中でも0歳魚としては高い水準であった。西日本においてはシラスから0歳魚まで概ね不漁であったが、伊勢・三河湾海域ではシラスが好調で、秋季も同群から成長したと考えられる未成魚・成魚が

主体で好漁であった。また0歳魚を主対象とする秋季の八戸の小あぐり、夏以降の九十九里海域の沿岸2そうまきも好漁で、12月初旬には常磐・房総の1そうまき・2そうまきでも0歳魚が漁獲されているため、2008(平成20)年級群の現時点での資源水準は、近年の中でも中～高水準であると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

(1) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩・薩南海域では、周辺海域のバッチ網漁業が低調であることから、来遊水準はあまり高くないと考えられる。日向灘では、道東から常磐・房総における秋冬季の漁況から、予測期間中は前年同様大羽(2歳魚(2007(平成19)年級群))の来遊による好漁は期待できず、前年並みの低調な漁況となる。豊後水道では、近隣海域における2008年のシラスやまき網が不漁であったことから、例年1～5月の主体となる1歳魚(2008(平成20)年級群)が少なく前年を下回ると考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(2) 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

熊野灘では、道東から常磐・房総における秋冬季の漁況から、予測期間中は前年同様大羽(2歳魚(2007(平成19)年級群))の来遊による好漁は期待できない。伊勢・三河湾～渥美外海では、2008年春季・秋季のシラスが好漁で秋季の未成魚も好漁であったことから、同海域においては予測期間中の漁獲の主体となる1歳魚(2008(平成20)年級群)の資源状態が良好であると考えられる。駿河湾～相模湾では駿河湾のシラス漁況、および相模湾での未成魚の漁獲量から、前年並みと予測される。

(3) 房総～道東(まき網、定置網)

2歳魚(2007(平成19)年級群)は、2008年秋季に道東で不漁であったことから、残存資源は少なく今後の漁獲の主対象とはならない。一方、1歳魚(2008(平成20)年級群)は9～10月の沖合調査における分布や各地の夏秋季の漁況から中～高水準と推定される。常磐・房総海域では、資源状態が良い場合には12～1月に2歳魚主体で漁獲されるが、今期は2歳魚(2007(平成19)年級群)が少ないため、成魚大型群が不漁となる。一方、例年であれば2月以降に来遊する1歳魚(2008(平成20)年級群)が12月時点で既に来遊しているため、1歳魚が主体となり、低水準であった前年を上回ると予測される。

三陸から道東の定置網では予測期間中は例年1歳魚が漁獲の主体であり、今期の1歳魚(2008(平成20)年級群)は前年の1歳魚(2007(平成19)年級群)より資源水準が高いと考えられることから、前年を上回ると予測される。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2009(平成21)年1月～6月)

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚(2008(平成20)年秋～2009(平成21)年生まれ)及び1歳魚(2007(平成19)年秋～2008(平成20)年夏生まれ)。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩～薩南では低水準の前年を上回り過去5年平均並み。日向灘では前年を下回る。豊後水道～土佐湾では前年並みか前年を下回る。紀伊水道外域では低水準。熊野灘では過去10年平均を上回り前年並み。

(2) 漁期：土佐湾の多鈎釣は4月まで。他は全期間。

(3) 魚体：16～23cm(1歳魚)が主体。4月以降は14cm以下(0歳魚)も来遊する。

漁況の経過(2008(平成20)年8月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態：

産卵量から判断して資源水準は高位、最近5年の推移から増加傾向にある。現在の漁獲は資源に大きな影響を与えていないと考えられる。なお、2007(平成19)年の産卵量は過去22年で最多を記録した2006年の0.83倍で、4番目に多かった。

2. 来遊量、漁期・漁場：

北薩～薩南海域では0歳魚(2007年秋～2008年夏生まれ)の来遊が過去5年平均並みに推移していることから、来遊量は低水準の前年を上回り、過去5年平均並みと予測した。日向灘では1～5月のシラス漁獲量が低水準かつウルメイワシシラスの混獲率が前年を下回り、南部の定置網での0歳魚の漁獲量も前年を下回ったことから今年の加入状況が良くないと考えられ、さらに翌年1～6月のまき網漁獲量と正の相関が見られる9月以降の漁獲量が前年を下回って推移しているため、来遊量は前年を下回ると予測した。豊後水道西部ではシラス漁獲物のウルメイワシの混獲率が前年を下回り、近隣海域も含めて0歳魚の漁獲量が前年を下回ったが、資源状態が過去20年では比較的高い水準と考えられるため、来遊量は前年並みか前年を下回ると予測した。豊後水道東部では7月以降の漁獲量が低水準であり、近県では比較的高水準であるが、来遊量は前年並みか前年を下回ると予測した。宿毛湾～土佐湾では0歳魚の来遊状況から来遊量は前年並みか前年を下回ると予測した。紀伊水道外域では0歳魚の漁獲量が極めて低水準で推移していることから、来遊量は低水準と予測した。熊野灘では8～11月の漁獲量が過去最高の前年を下回ったが、系群の資源状態が高位で増加傾向にあることから、来遊量は過去10年平均を上回り前年並みと予測した。

参 画 機 関

北海道立函館水産試験場	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
北海道立釧路水産試験場	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
青森県水産総合研究センター	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
宮城県水産技術総合センター	大分県農林水産研究センター 水産試験場
福島県水産試験場	宮崎県水産試験場
茨城県水産試験場	鹿児島県水産技術開発センター
千葉県水産総合研究センター	大阪府環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
東京都島しょ農林水産総合センター	香川県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産技術センター	気象庁 地球環境・海洋部 海洋気象情報室
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	海上保安庁 海洋情報部 環境調査課
静岡県水産技術研究所	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
静岡県水産技術研究所 伊豆分場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 瀬戸内海区水産研究所 中央水産研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	